

目的：本研究では、下記の4つの目標を持った。①日本産婦人科学会と日本新生児未熟児学会がそれぞれ固有に所有する周産期情報のデータベースをリンケージしたビッグデータを作成し今後の周産期疫学研究の基盤とする、②上記のデータベースの解析により日本の周産期医療の改善に直結する提言を多数算出し、妥当な根拠に基づく適切な医療に貢献する、③上記を通して、隣接する分野でありながら協力体制が希薄であった産婦人科医療関係者と小児科医療関係者の協力体制をはぐくむ、④周産期分野において、ビッグデータ解析に必要な疫学統計的知識や技術を持ちうる人材を育成する。

方法：日本産婦人科学会、日本新生児未熟児学会および日本周産期新生児学会の協力を得て、学会レジストリのデータベースを Probabilistic Linkage 法を用いて連結し、多角的に解析した。また、得られたデータベースは疫学研究セミナーを通して現場医師の疫学研究教育に用いることで、産科医と小児科医の研究分野での連携を促した。

結果：入力ミスの可能性なども考慮できるように、適切な統計学的手法を用いることで、それぞれ個別に運用されている周産期データベースを高精度で連結することが可能であった。不足が叫ばれている両分野の臨床家は、時間的制約により臨床研究を主導していくことは想像よりも更に難しく、多くの医療関係者が積極的に臨床研究を行えるようにするには、統計解析を分担して専門家が行う・論文指導を行う・英文校正を行う、などのサポート体制の構築が重要であった。しかし、適切な広報、教育機会の提供を行うことで、多くの産科および小児科医に、自らが関わっているレジストリの有用性を認識していただくことができ、またその解析を通して多数の新たな知見を生むことが出来た。

周産期関連データベースの相互関係図

